

美奈が歩いている。仕事帰り。

武の部屋へ向かっている。

しばらく歩き、角を曲がると、

嫌な雰囲気を感じる美奈。

瞬間、男が美奈のカバンを掴み、奪おうとする。

美奈「え？キャッ！」

強盗「う！」

美奈はしぶとく

カバンを奪われないように掴んでいる。

美奈「ちよ、やめて！」

強盗「この！」

美奈「キャッ！」

しばらく揉み合いになる2人。

足がもつれて、美奈は靴が脱げてしまう。

美奈「だれか！！だれかー！」

美奈がカバンを奪い返そうと、

思いつきり力を入れて引っ張ると、

手が男のサングラスに当たってしまった。

サングラスのグラスが1枚はがれ、

ポロリと地面に落ちる。

男の顔、目を見る美奈。

男は焦り、一気に力を込めて、カバンを奪い取る。

美奈は振り解かれ、

男はカバンを持って走り去る。

今頃になって、美奈の声を聞きつけて集まる人々。

美奈は後を追いかけようと靴を履き

恐る恐る小走りで追いかける。

しばらく行くと、美奈のカバンの中身が

道にポツポツと落ちている。

それをひとつずつ拾いながら

トボトボ歩く美奈。

部屋の片付けをしている武。

コマゴマしたカバンの中身を抱えて、

美奈が帰ってくる。

玄関ドアを開けて室内に入ってくる。

武 「おかえりー」

美奈を見て、様子がおかしい事に気付く武。

美奈に歩み寄る。

武 「何？どうしたの？」

美奈 「武くん・・・」

美奈、両手に抱えていた荷物を無視して

武に抱きつく。

瞬間、ホツとして泣き出す美奈。

人の足元に荷物がボトボト落ちる。

× × × （注・この間を実際に演じてみる）

カチャン。武が玄関の鍵を閉める。

武 「大丈夫だよ。鍵も閉めたから」

美奈 「うん」

美奈を抱きしめる武。

× × ×

武と美奈、横になっている。

武 「美奈……。寝れた？」

美奈、ぐっすり寝ている。

武 「美奈のそういうところ好きだよ」

寝ている美奈に向かって話す武。

眠れずに考え事をする。

目を閉じる。

電話が鳴る。

しばらくして電話に出る武。

武 「はい。もしもし」

武の母 「武？」

武 「あ、ああ。うん。俺。どうしたの？」

武の母 「あのね。今、病院にいるんだけど」

武 「え？何で？なんかあったの？」

武の母 泣き出す。

武 「どうしたの？」

武の母 「武、帰ってこれない？」

武からの目線で、途中になったものの画をつなぐ。

入れかけの紅茶。

開いた本。

開けっ放しの窓。揺れるカーテン。など

交番
(昼)

出掛ける美奈。見送る武。

出かける修。それを見送る踏太。

美奈に電話をかける香織。

美奈は電話に出ない。夫を見送る。

ネクタイを締めて、出勤準備の陽一。

舞子の写真に向かって（行ってきます。）

舞う枯葉

タイトル

美奈が引ったくり被害の届けに来ている。

扉に貼ってある地図に紛れて

覗き穴がある事を見つける美奈。

美奈「・・・」

警察官「道に落ちてたのは全部拾って、持って帰ったんですね？」

美奈「はい。全部かは分からないけど、

見当たるものは全部拾いました」

警察官「じゃあ、カバンと財布と手帳・・・ですね？」

美奈「はい。・・・こういうのって、見つかるんでしょうか？」

警察官「付近の防犯カメラとかも全部チェックしますから。

大丈夫ですよ。」

ひらけた道 住宅街（昼）

美奈が電話をしながら歩いている。

持っているのは、少し前に

気に入って使っていたカバン。

美奈「大丈夫ですって、前にお財布無くした時も

言われたけど、結局見つからなかったもん。

あれって、そう言わなきゃいけないんだろうね。

そういうマニュアルとかあるんだよ、きつと」

香織「そうかもね。見つからないですとは言えないもんね」

美奈辺りを見る。

美奈「今、ちょうど現場に来ちゃったの。ひったくりの」

香織「え、そうなの？」

美奈「うん。怖いな。そういえば、用事なんだっけ？」

香織「いや、だからね、明日さ」

美奈「あれ？あ、ちよつと待って！電池切れる！

またかけなおすよ。ごめん！」

電話のバッテリーが切れる。

美奈「ああ・・・」

もう一度辺りを見ながら歩く美奈。

7

武の部屋（昼）

美奈が帰ってくる。

玄関ドアを開けて室内に入る。

美奈「ただいまー」

武「おかえり」

美奈が室内に入ると、

テーブルの上に、盗られた赤いカバンがある。

美奈「あれ？あれ？！これ！」

武「うん」

美奈「どこで？」

武「高架の脇の草のそこ」

美奈「探してくれたの？」

武「うん」

美奈「ありがとう」

美奈カバンの中を見る。財布はないが、

手帳は入ってる。

武「財布はなかった」

美奈「うん。いい。手帳戻ってきたんだから。」

本当にありがとう」

武「うん。良かった」

美奈「中見た？」

武「見てないよ。大事なものでしょ」

美奈「うん。アイデア帳」

武「短歌の？」

美奈「うん」

美奈、手帳をカバンにしまい、

武に抱きつく。

美奈「武くん」

武「ん？」

美奈「ありがとう」

武「うん」

美奈「モヤモヤがすっきりした」

武「そっか」

美奈、大きなカバンが荷造りされている事に気付く。

美奈「あれなに？どこか行くの？」

武「うん」

×
×
×

武、部屋の中を右往左往して、

忘れ物等ないか、チェックしている。

その後をくつついて右往左往する美奈。

美奈「武くん、やっぱり見送りたいよ」

武「会社寄らないと行けないって言ってたでしょう」

美奈「でもー・・・」

武「・・・あ、そうだ」

台所に行き、ガスの元栓を閉める武。

それを見つめる美奈。

しばらく帰ってこない事を悟る。

武の家の前（昼）

大きなカバンを持って、武が出てくる。

美奈も武の小さなカバンを持って出てくる。

武「とりあえず、着いたら連絡するし」

美奈「うん」

美奈の会社
オフィス内（夕方）

武、美奈が持っていたカバンを取り、歩きだす。

美奈、見えなくなるまで武を見送る。

武も、随分行った後、振り返り、手を振る。

それに応えて、手を振る美奈。

武が見えなくなり、手を下ろす。

歩き出す。

前シーンから連続するように歩いている美奈、
オフィスに入ってくる。自分の席に着く。

美奈「4年間開いたままのガス栓を閉めた

しばらく帰らないんだ」

（回想）美奈からの視点。武がガス栓を閉めた場面。

去っていく武の後ろ姿。

武に応えて、振る自分の手。手を下ろす。

連続するように現在の美奈の手に戻る。

美奈はピアノのように、机の上で指を動かして
文字数を数える。

10

武の実家 玄関（夜）

武が荷物を持って、実家に帰ってくる。

母・恵子が出迎える。

武 「ただいま」

恵子 「ああ。お帰り。ありがとう帰ってきてくれて。心強いわ」

武 「うん」

恵子 「仕事大丈夫だった？」

武 「うん。大丈夫」

恵子 「そう。良かった」

武 「・・・とりあえず荷物置いてくる」

恵子 「夜ご飯食べてないでしょ？」

武 「うん」

恵子 「じゃあ、準備するね」

13	武の実家 武の部屋 (夜)	<p data-bbox="1177 942 1212 1557">武は自分の部屋へ行き、恵子は台所に行く。</p> <p data-bbox="858 942 957 1479">武、荷物を置き、ゴロンとなりながら携帯電話をかける。美奈へ。</p>	12	<p data-bbox="732 749 768 1174">美奈の部屋の近くの道 (夜)</p> <p data-bbox="606 942 642 1363">美奈、帰宅途中。歩いている。</p> <p data-bbox="540 942 576 1479">時計を見る。武はもう着いたのかなと</p> <p data-bbox="474 942 510 1429">考えながら、携帯電話を取り出す。</p> <p data-bbox="411 942 447 1460">バッテリーが切れていた事に気付く。</p> <p data-bbox="348 749 384 1178">美奈「あ、しまった・・・」</p>	11	武の実家 武の部屋 (夜)
----	---------------	---	----	--	----	---------------

武、携帯電話をいろいろな方向に向けては画面を見たり、耳に当てたりする。電波が届かない。

部屋に入ってくるなり、

携帯電話に充電器のプラグを差し込む美奈。

電話の電源を入れて一息つく。

カバンから手帳を取り出し本棚に納める。

同じような手帳が並んでいる。

直後、電話が鳴る。美奈あわてて電話に出る。

美奈「はいもしもし。」

香織「あ、もしもし？つながった」

美奈「あ、香織。ごめん。今部屋戻ってきたんだ」

香織「そっか。お疲れさま」

美奈「お疲れさま。あ、何だっけ？・・・」

香織「ほら。舞子の一回忌」

16	<p>霊園 舞子のお墓の前 (昼)</p> <p>喪服姿の美奈、香織、修、陽一がいる。</p> <p>手を合わせている。陽一以外の3人泣いている。</p>
15	<p>美奈「あ」</p> <p>カレンダーを見る美奈。日にちにしるしがしてある。</p> <p>(カレンダー日付や年のないものがあれば)</p> <p>駅近くのバスロータリー (昼)</p> <p>ベンチに、喪服姿の美奈、香織、修が座っている。</p> <p>(前から)</p> <p>しばらくすると、向こうから、陽一がやってくる。</p> <p>陽一に気付く3人。</p> <p>遠くから頭を下げる陽一。</p> <p>それに応えて、頭を下げる3人。</p>

美奈、香織、修、陽一が立っている。

修 「どうしよつか。どっか入ろうか」

美奈 「うん。久しぶりだから話したい」

陽一 「いや。ごめん、今日はもう。」

これから仕事に戻らなきゃいけないくて」

美奈 「えー。そっかあ」

陽一 「ごめん」

美奈 「うん。いいよ。大丈夫」

修 「じゃあ、また近いうちに集まろうよ」

美奈 「そうだね」

陽一 「うん。・・・木佐木。皆に連絡回してくれたり、

いろいろありがとう」

香織 「うん」

美奈 「来れて良かったよ」

ありがとう、という風にうなづく陽一。

別れ際に手を振ったきり、

一度も振り向かずに遠くに去っていく陽一。

駅近くのバスロータリー（昼）

ベンチに、喪服姿の美奈、香織、修が座っている。

（後ろから）

美奈「痩せてたね」

修「うん」

美奈「香織、陽一君とこまめに連絡取ってるの？」

香織「こまめにつて程じゃないけど。」

たまに近況聞いたりはしてたよ」

美奈「そっか」

香織「仕事忙しいみたい」

美奈「そっか」

修「忙しくしてるんだろ」

踏太が夕飯の準備をしている。修が帰ってくる。

修 「ただいま」

踏太 「おかえりー。結構時間かんだね」

修 「うん」

踏太 「お塩とかいるの？」

修 「ううん。大丈夫」

踏太 「そっか」

踏太、調理に戻る。

修、踏太に近付き、後ろから、軽く体を寄せる。

踏太 「今日はね。シチューだよ」

修 「うまそう」

踏太 「たぶんね」

修 「着替えてくる」

踏太 「うん」

修部屋に向かう

× × ×

楽な格好に着替え終わった修。

テーブルにはご飯に盛られたシチュー。

修 「シチューご飯にかけて食べるの？」

踏太 「え？そうだけど」

修 「そっか」

踏太、支度を終えてテーブルの所に来る。

踏太 「え？なんで？変？」

修 「変じゃないよ」

踏太 「違う食べ方あるの？」

修 「いや」

踏太 「なに？」

修 「パンとか」

踏太 「ああ。パンか。パンないや」

修 「いいよこれで」

踏 太 「本当？」

修 「本当。これが良い。食べよ」

踏 太 「うん。いただきます」

修 「いただきます」

2 人手を合わせて食べ始める。

踏 太 「今日。どうだった？」

修 「うん。まあ。やっぱり1年経っても辛いね」

踏 太 「そっか」

修 「1年経ってるからね。自分の中で、1年経ってるから

大丈夫だと思ってたんだ。

行く直前もそう思ってたんだけどね。

お墓の前行って、手を合わせて、

いろいろ思い出しちゃうと、駄目だね」

踏 太 「そっか。・・・何人くらい来たの？」

修 「僕と、その亡くなった舞子の旦那さん含めて4人」

踏 太 「少ないね」

修 「一応、クラスの連中とか、会社の人とか

連絡したみたいだけど。

結局仲良かったメンツだけ集まったな」

踏 太 「そっかあ」

修 「事情があつて、骨はそのお墓にないんだけどね」

踏 太 「え？ そうなの」

修 「うん。だけど集まれて良かったってみんなで話して」

踏 太 「そっか」

修 「来年の三回忌も必ず来るってお墓の前で約束したんだ」

踏 太 「え、二回忌じゃないの？」

修 「2年目は三回忌っていうんだよ」

踏 太 「え？ あ、そうなんだ」

修 「ははは（笑）かわいいな」

真作がくつろいで、一杯やっている。

香織、楽な格好に着替え、お茶漬けの準備。

お湯を注ぐ。

真作「何？ご飯食べてこなかったんだ？」

香織「うん」

香織、お茶漬けをテーブルに置き、手を合わせる。

香織「いただきます」

真作「あ、お母さんがつけた漬け物あったな。出すよ」

香織「ありがとう」

真作、立ち上がり冷蔵庫から

漬け物入りのタッパを出す。

フタを開けて、香織の前に置く。

香織「ありがとう」

と言って、もう一度手を合わせてから、

お茶漬けを軽くすする。ホッと一息ついて、

漬け物を食べる。

香織「お母さん、お漬け物つけるの、お上手ね」

真作「嫌味？」

香織「本当の事言っただけ」

真作、バツが悪そうに、焼酎ロックを一口飲む。

真作「せっかく出掛けたんだから、

何か食べてきたら良かったのに」

香織「いいの。今日みたいな日は、これで十分」

真作「でも、みんな久しぶりだったんだろ？」

香織「うん。一年振り。・・・お葬式の時以来」

真作「そっか」

香織「舞子亡くなって、それぞれ疎遠になってたから。

相原君の事も。

みんなどう接したらいいのか分からなくてね」

真作「相原さん・・・。どうだったの？」

香織「うん。・・・まあちよつと痩せてたけど。

しっかりしてたよ」

真作「そう。俺、本当に気の毒で。

お葬式の時も見えなかったなあ」

香織「うん」

21

陽一の部屋
(夜)

陽一、帰宅する。

生活感のない、シンプルな部屋。

舞子の写真が飾ってある。その前に水とお花が
供えてある。写真の前に来る陽一。

陽一「・・・」

舞子の写真を見つめる。ネクタイをゆるめ、ソファ
に横になる。

少し横になった後、机に向かい、仕事を始める。

22

武の部屋
(夜)

喪服姿の美奈が帰ってくる。

美奈「ふう・・・」

携帯電話を取り出し、武にかける。

が、電波が届かないという案内が流れる。

それを聞きながら、ベッドに倒れる美奈。

美奈「圏外だよ……。届かないよ……」

美奈、ゴロリと丸くなる。

美奈「寂しい……」

そう言いながら、メールなら届くだろうと、打ち始める。

最初の変換「寂しい」。そのメール画面を見て、少しごろごろした後、手で文字数を数えながら打ち加える。

美奈「寂しいと思う気持ちでいっぱいなの

この空間にはいないあなた」

しばらくメール画面を見ながらごろごろした後、保存ボタンを押す。

美奈「保存」

武の父・民雄と母・恵子が病室内にいる。

武が室内に入ってくる。

民雄「武。来てくれたのか」

武「うん」

民雄「そんな、わざわざ来てくれなくていいのに」

武「今、先生に話し聞いてきた」

民雄「そうか。お前仕事は？大丈夫なのか？」

武「大丈夫」

民雄「戻ってきてる暇ないだろ。お店一番忙しい時期だろ」

武「・・・」

民雄「わしは大丈夫だから」

武「いや、手術が終わるまではいる」

民雄「だから心配ないって」

武「心配だよ。本当に。だからいるから」

民雄「・・・」

美奈、仕事中。同僚が話しをしている。

大橋「はあ。もう・・・」

大橋、軽い頭痛。腰の痛み。

桜井「ん？」

大橋「お客さん来てるの」

桜井「お客さん？あ、生理ですか」

大橋「もう」

桜井「あ、すみません。結構重いんですか？」

大橋「結構ね」

桜井「大橋さん、ちょっとコーヒー飲み過ぎですよ」

大橋「そう？」

桜井「ちょっと待ってくださいねー」

と言って、カバンからゴソゴソ取り出す。

桜井「これ、はい」

ルイボスティーの袋を大橋に渡す。

大橋「レイボスティー？」

桜井「うちのお母さんにすすめられたんですけど、結構良くて、軽くなりましたよ。これのおかげか分かんないですけど。あげます」

大橋「あ、ありがとう」

ふーんという感じで袋を見る大橋。

桜井「うちのお母さんは更年期で。」

毎日、超イライラしてますよ」

大橋「更年期かー」

桜井「女って損ですよー。」

いっだってホルモンに振り回されてますよね」

大橋「そうねー」

会話をなんとなく聞いている美奈。

カバンから、肩をマッサージする棒を取り出し、

肩甲骨周りを揉む美奈。

そこへ結衣がお茶を持ってやってくる。

美奈のデスクに置く。

結衣「お疲れさまです」

美奈「あ、お疲れさま。あの、気を使ってくれなくて

大丈夫だからね」

結衣「はい！・・・ちよつと失礼しまーす」

と言いながら、美奈の肩甲骨周りを指圧し始める。

美奈「え、あ！いつつ・・・。何？」

結衣「どうですか？」

美奈「え？あ、気持ちいいけど」

結衣「私、指圧の学校行つてた事あるんです」

美奈「そう・・・あ、あの、もう大丈夫だから」

結衣「でもコリが・・・」

美奈「いつつ・・・」

結衣「ここの、コリコリ」

美奈「いや。うん。も、もう大丈夫！」

結衣「でもコリ・・・」

美奈「ちよつと頭痛くなつてきちゃったから」

結衣「あ、すみません」

桜井と大橋、見ている。

美奈「うん……。はあ。あの。私のチーム来たからって

別に特別な事してくれなくていいんだからね」

結衣「あ、はい。すみません」

と自分のデスクに戻る結衣。

結衣「あの、私、里中さんのチームに來れて嬉しいです。

里中さんみたいにバリバリ仕事したいんです」

美奈「あ、……。そう」

結衣「はい！」

美奈「……。」

内心、若いっていいなあという気持ち。

修の部屋（夜）

踏太、夕飯の準備をしている。

（皿を出していたり等）

そこへフラフラと修がやってくる。

修 「あ、めまいが・・・」

と言つて、フラリとなり、踏太に抱きつく。

踏太 「あ、もう」

修 「ふー。あぶなかった」

と言つて、離れるが

修 「まためまい・・・」

と言つて、踏太に抱きつく。

踏太 「もう」

修の部屋 (夜)

修、瓶に500円玉を入れる。つもり貯金。

修 「出かけたつもり。今日結局出かけなかったし」

踏太 「ふーん」

修 「踏太とどっか旅行行きたいな」

踏太 「ふーん」

修 「いつになるやら」

踏太「・・・」

修の部屋（夜（7時ちょうどくらい））

夕飯食べている修と踏太。

（メニュー何が良いかな。トンテキ？）

修、考え事をしながら肉を切っている。

皿とナイフがこすれる音。

踏太「う！」

修「？」

踏太「その音苦手・・・」

修「あ、ごめん」

と言つて、すでに切れている肉を口へ。もぐもぐ。

踏太「どうしたの？」

修「ん？あ、ちよつと考え事」

踏太「なに？」

修「え？ああ。こないだの、一回忌のね」

	28		29	
	修の部屋 家の前 (夜)	踏 太「うん」 修 「改めて、集まりたいねって話しになったから。どういう風にすれば良いかなってさ」 踏 太「なるほど。うーん」	修の部屋 玄関 (夜)	修 「はい」 美 奈「来たよ。おじゃましまーす」 ピンポーン。呼び鈴が鳴る。 修、扉を開ける。

修 「うん。皆一緒に来たの？」

美奈 「うんそうだよー」

香織 「おじゃまします」

修 「うん」

陽一 「おじゃまします」

修 「うん」

室内に入る。

修の部屋 ダイニング (夜)

ダイニングテーブルにたくさんの料理。

キッチンに向かって、準備をしている踏太。

(紹介されるまでわざと熱中してるように)

キッチンに向かっている)

修 「あ」

といって、踏太のところに行く。

修 「踏太だよ」

踏太「はじめまして。こんばんわ」

美奈「あー。踏太くん。はじめまして。」

突然おしかけてごめんさないね」

踏太「いえ、僕も居候の身なんで。おじゃまします」

修「・・・これ、踏太が作ったんだよ」

美奈「わー。すごい」

香織「踏太くんお料理上手だね」

皆、料理を見る。

× × ×

皆、食事を楽しんでいる。

陽一「こういう風に、食事するの久しぶりだな」

修「そう」

陽一「一回忌にも集まってくれて。こういう風に集まれて。

ありがたいよ」

陽一「良かった」

香織はあまり食べていない。

踏太「あ、あの。お口に合いませんでしたか？」

香織「いえ。おいしいですよ」

美奈「あんまり食べてないよね。食欲ないの？」

香織「うん。まあ」

美奈「何、体調悪いの？」

香織「ううん」

美奈「？」

踏太「・・・赤ちゃん？」

香織「え？あ。・・・うん」

美奈「えー本当に？！すごい！良かったね」

香織「うん」

陽一「おめでとう」

香織「ありがとう」

踏太に向かって

香織「何で分かったの？」

踏太「何となくだよ」

美奈「いいなあ。赤ちゃんかあ」

踏太「美奈さんご結婚は？」

美奈「まだだけど。もうすぐ」

修「へー」

美奈「したい」

何それと言った感じで、みんな軽く笑う。

修、チラリ踏太を見る。

（結婚、家族という話題を受けて）

踏太も修を見る。修、笑いかける。

香織「美奈、結婚願望なかったんじゃないの？」

美奈「前はね。でも最近は急に」

香織「ふーん」

陽一、唇を尖らせたり、嚙んだりしている。

それを見て

修「どうしたの？」

陽一「え」

修「口」

陽一「ああ。エビが」

× × ×

踏太、座ったまま

コクリコクリと眠りに入りかけている。

修は、しばらく前から、

踏太が眠そうにしていた事に気付いていた。

修「ごめん。そろそろ」

と小声で皆に伝える。

踏太を見て、皆、静かに頷く。

修「踏太、朝早いから」

美奈「仕事？」

修「新聞の配達」

美奈「そうなんだー」

修の部屋 玄関 (夜)

陽一、美奈、香織帰る。

見送る修。陽一唇を舐めている。

修 「まだ痒い？」

陽一 「いや。大丈夫。いつもなるから」

美奈 「うちの弟もエビ好きなのに、いつも口が痒いってさー」

靴を履き終え、玄関先に出る。

陽一 「久しぶりで。楽しくて。長居しちゃって悪かった」

修 「ううん。良かった。また」

陽一 「うん。踏太くんにもよろしく言っておいて」

修 「うん」

じゃあ、といった感じで

陽一、美奈、香織、頭を下げる。

修の家の前の道 （夜）

陽一、美奈、香織、

マンションの入り口から出てくる。

香織「じゃ、私、メトロ使うから」

美奈「あ、うん」

陽一「木佐木。おめでとう」

香織「あ、ありがとう」

陽一「うん」

美奈「・・・おめでとう」

香織「ありがとう。じゃ。また」

と言って、駅の方角に歩く香織。

それを見送る陽一。

美奈には、陽一の見送っている表情が
寂しそうに感じる。

駅までの道（夜）

陽一と美奈、歩いている。

陽一「武と、最近どうなの？」

美奈「うん。今、武くんのお父さんが倒れちゃったみたいで、
実家に帰ってる」

陽一「ああ。そう」

美奈「なんか、病気の事だし、詳しいこと聞けないからさあ。
いつ帰ってくるか分からないんだあ」

陽一「そっか」

美奈「あと、電波届かないし」

陽一少し笑う。

美奈「私、もうすぐ30だよ・・・」

陽一「あ、そうだね」

美奈「それでなんか将来の事考えると、
急に不安になってきちゃってさ」

陽一「不安って？」

美奈「武くんと付き合って、もう5年になるから。

これからどうなるのかなーとか。

武くん、実家に帰りたいて前から言ってるし」

陽一「うん」

美奈「そうになると、私どうなるんだろうって。

仕事辞めて一緒に行くのかな、とか。

でも、そんな話、全然してなくてさ。

なんか落ち込んじゃうんだあ」

陽一「そっか」

美奈「だいたい3年過ぎても結婚の話が出てこないと

駄目になるとか言わない？」

陽一「なんかあるね」

美奈「あ、でも陽一さんと舞子は結婚まで7年だったね」

陽一「うん」

美奈「あ、ごめん」

陽一「ううん」

しばらく歩く。

陽一「武とちゃんと話せばいいんだよ」

美奈「うん・・・」

陽一「好き、ありがとう、ごめんね

ちゃんと今、言っちゃいけないと。

34	<p>修の部屋 (夜)</p> <p>いつでも言えると思ってたら後悔するよ」</p>
35	<p>香織の家 リビング (夜)</p> <p>酒を飲んでいる真作。香織が帰ってくる。 (ここの真作がしている行動、 たたずまいは真作と意見を出して作りたい)</p>

踏太、ベッドで熟睡している。
(踏太がどうやってベッドまで行ったのか、
修と踏太で要確認)
修、寝室に入ってくる。
パタン扉閉まる。
ベッドに入り、後ろから、ギュッと
踏太を抱きしめる。

香織「ただいまー」

真作「あ、おかえり。楽しかった？」

香織「うん。なんか久しぶりにいっぱいおしゃべりしてきた」

真作「そっか。良かった」

香織「ありがとう。何食べたの？」

真作「手巻きしたよ」

香織「そう」

香織、お茶を入れる準備をする。

（ここも香織と相談）

テーブルの上の紙を見つける香織。

手に取る。男の子の名前と

女の子の名前が書かれている

香織「なに？」

真作「あ、ああ。父さんと母さんの、

希望

っていうか。・・・赤ちゃんの名前」

香織「もう。言っちゃったの？」

真作「え」

香織「落ち着くまで言わないでいようって言ったじゃん」

真作「ごめん。心音。確認出来たって言ってたから。」

もういいのかと思つて・・・」

香織「・・・」

真作「ごめん」

香織「うん。いいよ」

真作表情ゆるめて香織のそばに寄る。

真作「すごい喜んでくれたよ」

香織「そう？」

真作「うん。男の子か女の子が分かったら

早く教えなさいって。

いろいろ準備しなきゃいけないんだからって」

香織「そっか」

と微笑む。真作は香織に体を寄せている。

恐る恐る聞く感じで、

真作「またさ、下で一緒に飯食べたり、しょ？」

香織名前の書かれた紙を見つめている。

真作「・・・無理？」

香織、明るい口調で、

香織「考えとく」

真作嬉しくて、香織の体に顔をうずめる。

（匂いをかぐ感じ）

紙を持つ香織の手。手がテーブルに下がり、
下腹部の寄りになる。

修の部屋（朝）

朝ご飯途中の踏太。うつらうつらしてる。

修は洗い物中。ピンポンと呼び鈴が鳴る。

踏太は寝てしまっている。修が出る。

修「はいー」

玄関ドアを開けると、母・奈津子が立っている。

修「え？どうしたの」

奈津子「来ちゃった」

修「来ちゃったじゃないよ。どうしたの？」

奈津子「えー。久しぶりに遊びにきただけよ」

修「なんで連絡しないの。また姉さんと喧嘩したの？」

奈津子「おじゃましまーす」

とズカズカ入る。修、慌てて

修「ちょ、ちよつと待ってよ。いきなり」

奈津子「おじゃましまーす」

と奈津子が室内に入ると、

踏太がムクリと顔を上げて目覚める。

踏太「？こんにちわ」

奈津子「こんにちわ」

× × ×

ベッドに仰向けになって寝ている奈津子。

時折腰をさすってつぶやく。

奈津子「いつつ・・・」

遠くの景色を見ながら話す。

少し寒い。

修 「ごめんな」

踏太 「なんで謝るの？」

修 「いや。・・・気使わせちゃって」

踏太 「彼氏の親って初めて見た」

修 「そっか」

踏太 「・・・」

修 「・・・。なんか夜行バスで来たみたいで。腰痛いって」

笑う踏太。

踏太 「今日は、僕いいから。お母さんと出掛けなよ」

修 「いいの？」

踏太 「いいよ」

修 「ごめん」

踏太「親孝行してあげなよ」

修「うん」

踏太「僕の事、変に思ったかな？」

修「思ってないよ」

踏太「焦ったんじゃないの？」

修「全然」

踏太「ふーん」

修「紹介するよ」

修の家 リビング (昼)

踏太と修並んで立っている。

修「母さん」

奈津子「なに・・・」

とチラリ、2人を見る。

修「こちら、林馬踏太くん。一緒に住んでる」

踏太「はじめまして」

と頭を下げる。

奈津子「あ、あらあ。ああ、そう。息子がお世話になってます」

と言いながら、体勢を整えてベッドの上で

おじぎするが、瞬間、腰が痛くなる。

奈津子「いたたた」

踏太吹き出して、笑ってしまう。

修にこずかれる。修、大丈夫か？といいながら

奈津子に近寄る。若くないのに、

夜行バスとか無理するからだよとか

湿布だす？とか、なんとか言っている。

その様子を見ている踏太。

踏太には親がいないので、複雑な心中。

踏太、窓際に立って、

修と奈津子が出掛けるのを見ている。

42	都心の街 (夜)	踏太が歩いている。
41	ベッド (夕方)	<p>ベッドに寝転がりながら 携帯電話をいじっている。 (どちらの場面も行動は、踏太と相談して決めたい)</p>
40	修の家 リビング (夕方)	<p>しゃべりながら、駅方面に歩く2人。 それを窓から見ている踏太。</p> <p>携帯電話でゲームをしている。 ツイッター見ている。</p>

(いろんな場所を歩いていたり、

立ち止まっていたり。

いくつものカットを合わせて、

さまよっている感じにしたい)

踏太、電話で友達と話している。

道端のベンチに座っている。

踏太「今日さ、彼氏のお母さん来ちゃってさ」

友樹「え？マジで」

踏太「そうそう」

友樹「会ったの？」

踏太「会ったよ。紹介してもらった」

友樹「へー。そっか。嬉しいね」

踏太「まあね。でさ。まあ気使うし、

親子水入らずって事で、今日帰らないんだけどさ」

友樹「うん」

踏太「友樹ん家に泊めてくれない？」

友樹「えー。・・・ごめん。無理」

(ここから)

踏太「なんで？」

友樹「え。あ。今日さ、彼氏泊まりにくる」

踏太「え？出来たの？」

友樹「うん」

踏太「言つてよー」

友樹「いや、まだはじまったばかりでさ」

踏太「マジかあ」

友樹「うん。悪イ」

踏太「まあじゃ仕方ないね。今度会わせて」

友樹「それまで続けばいいけどね」

踏太「あつあー。ま、じゃあ」

友樹「あ、他にアテあるの？」

踏太「うーん。どうだろ」

友樹「寮は？寮いけば？」

踏太「寮、自分の部屋ないし。あそこ戻りたくない」

友樹「そっかー。力になれずごめん」

踏太「大丈夫。ありがと」

友樹「寂しくなっても変なところ行かないように」

踏太「いかねーよ」

友樹「じゃあ」

踏太「じゃ」

と電話を切り、どうしようかなーとうつぶき、
携帯をいじくりながら悩む。

修の家の前の道（夜）

修と、母・奈津子帰ってくる。

修は部屋の窓を見上げる。

電気が点いていないので、

踏太が不在だと知る。

踏太、路肩にしゃがんでいる。

そこに細路がやってくる。

何度か行ったり来たりする。

踏太をチラチラ見ている。

踏太も細路をチラリ見る。

踏太の隣にやってきて、ジッと踏太を見る細路。

踏太も細路を見る。

そこに、那之助（やすのすけ）と秋司（しゅうじ）が通りかかる。

那乃助「あれ、踏太くん？」

那之助の側に向き直る踏太。

踏太「那乃助さん」

と顔を上げて那乃助を見た後、

秋司を見て頭を下げる。秋司も頭を下げる。

踏太、那乃助、秋司が

バーのカウンターに座っている。

那乃助「久しぶり。じゃ、カンパーイ」

と言って乾杯。那乃助、ビールを一気に飲み干す。

トンとカウンターに置くと

マスターも分かっていたようで、

すぐさま2杯目のビールを出してくる。

それもまた一気に飲み干す。

秋司「いい加減それやめなよ・・・」

踏太笑う。

那乃助「ふう」

と言って飲み干し、トンとグラスを置く。

すかさず、レモンチューハイが出てくる。

それには手をつけない。

那乃助「彼氏出来たんだろ？」

踏太「うん」

那乃助「彼氏出来るといってもパタッと連絡なくなるよな」

踏太「・・・」

秋司「今日は？」

踏太「ちよつと」

秋司「そう」

踏太「那乃助さん達は？」

秋司「買い物帰り」

踏太「ふーん」

那乃助「いつ出来たの？」

踏太「花見のちよつと後」

那乃助「ふーん。じゃ付き合って半年くらい？」

踏太「うん」

那乃助「順調なの？」

踏太「うーん。まあ」

那乃助「ふふふ（笑い）。まあ。半年くらいとか

いろいろ出てくるよな」

踏太「2人、もう長いよね」

那乃助「俺ら？」

秋司「7年だね」

那乃助「そうだな」

踏太「ケンカとかする？」

那乃助「そりゃしょっちゅう」

踏太「でも別れないんだ？」

那乃助「うん。まあな。好きだからな。」

それでなんとかやってきたよな」

秋司「うなづく」

踏太「ふーん」

那乃助「そっちは？一緒に住んでるんだろ？」

踏太「うん」

那乃助「やどかり踏太だもんな」

踏太「違うよ」

秋司「今日は帰らないの？」

踏太「うん」

那乃助「けんかしたのか？」

踏太「違うよ」

那乃助「じゃあ何フラフラしてんの。彼氏待ってるぞ」

踏太「・・・」

那乃助「なんだよ。珍しいな。なんかあったの？」

踏太「・・・なんか虚しいんだ」

那乃助「なんで？」

踏太「だってさ。僕ら虚しいじゃん。

なんで付き合ったり一緒にいるの。

どうせ家族になれる訳じゃないじゃん」

那乃助「家族になれないのか？」

踏太「そうだよ。結婚出来る訳でもないし。

赤ちゃん出来る訳でもないし」

那乃助「そんなん無くて、

俺らもう家族みたいになってるけど。な」

秋司「うん」

踏 太「そっか。だよね。僕の問題だよね。」

寂しい時とか。今寂しいから、

誰でもいいかなって思っちゃう事あるしさ」

秋 司「・・・」

那乃助「あ、おい。またバイの人なの？」

踏 太「なんで？」

那乃助「前付き合ってた人、バイの人で

結婚するからって捨てられたって言ってたじゃん」

踏 太「ああ。違うよ。バイの人じゃないし。たぶん」

那乃助「まあ。俺も結構お前の歳の頃悩んでたけど。

結婚とかなんとかってどうでもいいじゃん。

結局、本当に一緒にいたいやつと居たいって。

それだけじゃないの？」

秋 司「・・・」

（時間経過入れるかも）

踏 太「・・・2人いいよね。」

なんか今日幸せな気持ちになったんだ」

秋 司「？」

踏 太「2人は別れずにずっと一緒にいてね。

それで僕に、愛とかって、ある事、証明し続けてね」

那乃助「なんだよ急に・・・」

ピ。ピ。ピと携帯電話のアラームが鳴る。

秋 司「あ、終電だ」

那乃助「そっか。悪い。またゆっくり会おうよ」

踏 太「うん。ごめん。なんか暗くしちゃって」

那乃助「いいよ。気にするなよ。じゃな」

と言ってる間に、秋司が会計を済ませている。

那乃助と秋司、店の出口に歩いていく。

踏太の後ろ姿を見る秋司。

那乃助と相談。

立ち止まり、踏太へ

秋 司「踏太くん。家来ない」

振り向く踏太。

ベッドに横になっている奈津子。

奈津子の腰に湿布を貼る修。

めくれていたシャツの裾を戻す。

奈津子「ああ。ありがとう」

修「効くの？」

奈津子「まあ、気休めみたいなもんだけど」

修、寝室から出る。戸を閉めようとする。

奈津子「あ、開けておいて。まだ寝ないから」

修「・・・」

修、携帯電話を取り出し、見る。

踏太からの連絡はない。

× × ×

修、仕事の書類を取り出し、
テーブルで作業している。

お湯が沸き、コップに注ぐ。

イスに座る前に寢室を覗く。

奈津子「起きてるよ」

修「ああ」

奈津子「まだ寝ないの？」

修「うん。もうちょい」

奈津子「仕事？」

修「・・・うん」

奈津子「仕事楽しい？」

修「まあ。・・・母さんは？」

奈津子「お母さん？ねー。楽しいけどしんどいよ。

いつでも辞めたいって思ってるよ」

修「辞めてやりたい事あるの？」

奈津子「別にないけど」

修「・・・」

奈津子「仕事楽しいって幸せな事だよ」

修「そうだね」

奈津子「結婚って人生で大きな事だもんね。」

そういう場面に出会う仕事って。良い仕事だよね」

修「まあね」

奈津子「人の事もいいけど。修はどうなの？」

修「なに？」

奈津子「結婚。やっぱりしないの？」

修「しないよ」

奈津子「そんな、決め付けなくてもいいのに」

修「・・・」

奈津子「まあ、お母さん、修がどんな生き方しても良いけど。」

歳とってから一人は辛いよ。どんな人でも

一緒に生きてくれる人いたら、お母さん安心だわ」

寝室をチラリ見る修。

ベッドの布団を畳んで、片付けている奈津子。

帰る様子。

（編集つながり的には

前のシーンの修の见ているものとしてつなげる）

窓から外を見る修。天気晴れ。

奈津子リビングに戻ってくる。

コートを着ている。

修 「今日、なんか暑そうだから、

そんなに着なくて大丈夫だと思うよ」

奈津子 「そう？こないだも異常に暑い日あったね」

修 「うん」

奈津子、とりあえずマフラーをカバンにしまう。

修 「コートもいらなと思うよ」

奈津子 「そう？でもお腹出てるの隠れるでしょ？」

修 「出でないよ。ジャケットだけでいいじゃん」

奈津子 「そっか」

と言って、コートを脱ぐ。

奈津子 「あ、そうだ」

と言って、カバンから薬を取り出し、
水をコップに注ぐ。

修 「それ何？」

奈津子 「血圧の薬」

修 「血圧高かったっけ？」

奈津子 「前に急に上がった事あってね。」

血圧の薬は一回飲み始めたら

また上がった時に怖いから、

ずっと飲んでおかないといけないの」

薬を飲む。薬の入っていた袋をカバンにしまう。

修、後ろから肩に手を置いて軽く握る。

奈津子 「・・・どうしたの」

修 「仕事、嫌だったら辞めれば。お金困る訳じゃないだろ」

奈津子 「辞めてどうするの。する事なくて家いてたら、

すぐ、もうろくしちゃうよ」

修 「・・・」

奈津子 「今回、修のところ来て、リフレッシュ出来たから。」

51	<p>美奈の会社 オフィス（昼）</p>
50	<p>結婚式場 （昼）</p> <p>修が式を挙げる予定の2人を 案内している。</p>
49	<p>駅前の道 （朝）</p> <p>修 「うん」</p> <p>大丈夫。・・・ありがとうね」</p> <p>と言って、手を下ろす。</p> <p>修と奈津子、お別れ。</p> <p>奈津子「またね」</p> <p>と言って手を振り、駅に向かって歩いていく。</p> <p>修、無言で手を上げ応え、見えなくなるまで見送る。</p>

お昼休憩。

乾、書類を美奈のところに持ってくる。

乾 「里中さん」

美奈 「はい」

乾 「休憩中すみません。これ目通しとい

もらえますか？」

美奈 「はい。分かりました」

桜井が漫画を読んでいる

桜井 「ふむふむ。へー。なるほどねえ」

美奈、桜井の声に気が散る。

桜井 「えーあらま。そっかあ。へー」

といいながら漫画を読んでいる。

ページをめくる度に反応がデカい。

美奈 「あの、桜井さん」

桜井 「わー。そうなるか？ふむふむ」

美奈 「ちょっと。桜井さん」

桜井「・・・はい。なんです？」

美奈「気が散る。声出ちゃうなら休憩室行ってください」

桜井「すみませくん。怒られちゃった」

と言つて丸くなる。大橋に話しかける。

桜井「ねー、まだですかー？」

大橋「オッケイ。行こか。貞治係長も行きます？」

橘「あ、うん。混ぜて」

桜井「私タイカレー食べたいですー」

と言いながら3人並んでオフィスを出ていく。

美奈もひと段落つき、カバンから、

駅前で買ってきたパンを取り出す。

ふと、結衣を見る。

お弁当を食べながらパソコンに向かっている。

食べる時は手で口元を隠して、

モグモグしている時にパソコンに向かい

作業をしている。

美奈、頑張ってるわねという風に見ていると、

結衣気付き、頑張ります！と言ったポーズ。

美奈、パンを取り出し、食べる。クロワッサン。

サクサクのデニッシュ部分のカケラが

ポロリと落ちる。

ブーンと美奈の携帯電話がバイブレーション。

武からのメール。

父親が肺がんで手術する事になった事。

しばらく実家にいる事が書かれている。

美奈の会社 休憩室（昼）

美奈、武に電話をしている。

ガチャリ。電話に出る武。

武 「もしもし」

美奈 「もしもし武くん？」

武 「うん。久しぶり」

美奈 「やっと電波届いたよ」

武 「ごめん。俺の部屋、全然無理で。今、外だから」
美奈 「そっか」

プー プー。電話が切れる。

美奈、かけ直す。プルプルプル、ガチャリ。

美奈 「もしもし」

武 「あ、ごめん。電波途切れた」

美奈 「もう」

武 「なかなか連絡出来なくて、ごめん」

美奈 「メール見たよ」

武 「うん」

美奈 「お父さん。大変だね」

武 「うん。肺がんって。舞子さんの事もあるから。心配で」

美奈 「うん。武くんは大丈夫？」

武 「俺は。大丈夫」

美奈 「良かった」

武 「手術終わって、退院するまではいてあげたいんだ」

美奈 「分かってる。いてあげて」

武 「ありがとう」

美奈 「私、武くんがお父さんやお母さんを

大事にする人だつてとても好きだから」

武 「ありがとう。寂しくさせてごめん」

美奈 「大丈夫。しょっちゅう武くんの部屋行ってるから」

武 「え？行つて何してるの？」

美奈 「行つてー。短歌考えてるの」

武 「そう」

美奈 「あのね、もうすぐ私、誕生日だよ」

武 「分かってる」

美奈 「30だよ」

プープー。電話が切れる。

かけ直そうとするが止める。

短歌。

電話をパタンと閉じる（サイズより）

武の実家 いわゆる田舎といった感じの道（昼）

55	陽一の部屋 (夕方)
54	修の部屋 (夜)

武、電話をいろいろな方向へ向けて
電話をかけようとしている。

そこに、電話の、電波が立ってない音がぶせる。

「ふっふっふっふ・・・プープープー」

修、部屋に帰ってくる。

暗い室内。照明をつけるが、踏太はいない。

電話をかけてみる

電話「おかけになった電話は、電波の届かない場所にいるか

電源が入っていない為・・・」

パターンと電話を閉じる。

ピンポンと呼び鈴が鳴る。

陽一「・・・はい」

がちやりドアを開けると荷物の配達員。

配達員「お届けものでーす。失礼しまーす」

× × ×

陽一の部屋いっぱいに段ボール箱の山。

配達員「じゃ、これですべてです。ありがとうございましたー」

ペコリ頭を下げる陽一。突然の大量の荷物に驚いている。

陽一の部屋
(夜)

陽一、舞子の姉・清美に

電話をかけている。

手には荷物の伝票。ガチャリ。

陽 一「あ、あの。もしもし」

清 美「もしもし？」

陽 一「相原です。稲森さんですか？」

清 美「はい」

陽 一「お姉さん。ご無沙汰してます」

清 美「・・・はい」

陽 一「あの、今日、先ほど、

荷物が届いたんですけど・・・」

清 美「はい」

陽 一「・・・あの、これは？」

清 美「舞子の。遺品です」

陽 一「全部ですか？」

清 美「ええ」

陽 一「あの、何で急に？」

清 美「今度、私、結婚する事になりました」

陽 一「あ、そうですか。・・・おめでとうございます」

清美「はい。それで、夫と海外に行かなくてはならないんです」

陽一「はあ」

清美「今の家は引き払わないといけなくて」

陽一「そうでしたか」

清美「はい。・・・それで、持っていく訳にはいかないし、

私は捨てる気持ちになれないので。

陽一さんのところに送らせて頂きました」

陽一「そうですか・・・」

清美「陽一さんの好きなようになさってください」

陽一「・・・分かりました。あの、それで、お骨は？」

清美「・・・」

陽一「お骨はどうされるんですか？」

清美「あちらに持っていきます」

陽一「そんな・・・。あの、返して頂けませんか？」

清美「え？」

陽一「そろそろ舞子をゆくつりさせてあげてください」

清美「陽一さん。陽一さんは、

陽一「・・・」

舞子と過ごしたのは7年ちよつとでしたよね？

私たちは20年以上、

姉妹2人だけで生きてきたんですよ。

まだ整理がつかないんですよ。

自分でもおかしい事、分かってます」

× × ×

ゆっくり、パタリと携帯電話を閉じる。

和室を見る。

陽一からの視線。寝転がる舞子。

舞子は畳が好き。和室に良く寝転がっていた。

和室を見つめる陽一。山積みの段ボール。

部屋に美奈、香織、修が訪れる。

美奈「おじやましーす」

リビングに来る3人。

美奈、段ボールの山を見るなり、

美奈「うわぁ。すごい量だね」

陽一「うん」

美奈「これは一人じゃ大変だよ」

陽一「悪いね」

美奈「ううん。やろう」

陽一「うん」

香織、修もおなずく。

× × ×

それぞれ段ボールを空け、中の物を出している。

香織「服は。どうするの？」

陽一「・・・服はもう・・・」

香織「分かった」

といて、服を捨て始める。

美奈「これ・・・靴だあ。靴もだよね？」

陽一「うん」

靴を捨て始める。美奈、何か感情がこみ上げてくる。

美奈「はあ」

香織「？」

美奈「ちよつと待ってね」

と立ち上がり。

窓際へ行く。

美奈「ごめん。結構辛いよ。ふう」

陽一「無理しなくていいよ」

美奈「ごめんね」

舞子のをどんどん捨てていく香織、陽一、修。

美奈「よし」

と行って、また片付けに加わる。

入っていた物が無くなった段ボールは畳まれる。
積み上がっていた段ボールは

どんどん無くなっていく。

美奈「こういうのまで残してあったんだ・・・」

何枚もの半紙。小学生時代の習字の練習。

いくつかおもしろい言葉。微笑ましく見る美奈。

「希望」の文字。花丸がしてある。

陽一「それも。いいよ」

美奈「うん」

捨てる。

香織が上に積み上がっている段ボールを

下ろそうとしている。修、気付き、

（香織の赤ちゃんを思つて）

修「木佐木。変わって」

香織「あ、うん」

修「よ、あ、これ重い」

と言つて、しっかり持ち直し、下に下ろす。

修 「何入ってるんだろ・・・」

段ボールを開ける。アルバムや写真。

香織 「すごい量だね」

美奈も写真の入った段ボールに近づく。

美奈 「舞子、よくみんなを撮ってくれたよね」

陽一 「自分が写るより、撮る方が好きだったよ」

香織 「あ、お姉さんとのも、あるよ。分けようか」

陽一 「うん」

写真やアルバムを出し、手分けして整理する4人。

美奈 「あ、これ耐寒登山の時のだ・・・」

修 「あ、本当だ。舞子写ってない」

陽一 「舞子が撮ってくれたんだよ」

美奈 「・・・（一緒に撮った記憶がある）」

束になった写真をめくる。

美奈と舞子が写っている写真。

泣いてしまう美奈。

香織 「ここのは全部いるものだから。こっち片付けよう」

美奈「・・・うん」

と言って、別の箱を開け、中身を出して片付ける。

陽一、写真の整理をする。ふと目にとまる

自分との写真が納められたアルバム。

いろいろな場面の舞子と陽一の写真。

× × ×

お姉さんに送る分の写真をまとめて、袋に詰めている陽一。和室を見る。

陽一からの視線。

三角座りしている舞子。コロンと横になり、

伸びをして、丸くなる。

段ボールがポツンと和室に一つある。

美奈、香織、修、部屋に戻ってくる。

陽一「大丈夫だった？」

修「あ、うん。これ」

遺品整理会社からの手紙と領収書を陽一に渡す。

修 「大きなもの無いから、少しずつお炊き上げしてくれるって」

陽一 「そう。良かった」

段ボールが無くなった部屋を見る4人。

陽一 「今日は、本当にありがとう」

うなずく、3人。

香織 「相原くん、舞子のお骨は・・・」

陽一 「お姉さんが持つてる」

香織 「どうするの？」

陽一 「持っていくらしい。いい加減戻して欲しいんだけど。

今、話し合ってる」

香織 「そう・・・」

帰り道
(夕方)

修、香織、美奈、歩いている。

美奈、立ち止まり、

落ちてくる枯葉や風を感じている。

携帯電話がバイブレーション。

ブーン鳴る。

メールを見る美奈。

武NA「父さんの手術終わりました 武」

(NAか画面)

画面を見つめている美奈。

落ち葉は絶えず落ちてくる。

香織の家 キッチン (昼)

台所で料理をする香織。早めの準備。

ピーマンの肉詰め。香織の表情寄り。

野菜を切っている音。周りの材料など料理準備の画。

香織の表情が曇る。腹部に鈍痛。

が、急に激痛に変わる。手元の寄り。

ピーマンがパカリ半分に切れたところで

あまりの痛さに倒れ込む。

60

美奈の会社　オフィス　（朝）

美奈、出社してきて、準備。

コーヒーを自分で入れて飲んだり？

桜井も出社してくる。

桜井「おはようございます」

美奈「おはよう」

桜井、席に着くとカードが置いてある。

桜井「ん？」

と座ってカードを読み始める。

桜井「ふんふん。へー」

そこに結衣が出社してくる。

橘や大橋、が結衣に駆け寄る。

橘「おめでとうー」

大橋「おめでとうー」

結衣「ありがとうございます」

キョトンとした表情でそれを見ている美奈。

美奈「何？なんかあったの？」

桜井「え、ああ。結衣ちゃん結婚するみたいですよ」

美奈「え？あ、うそ？」

桜井「ほら、これ」

とメッセージカードを見せる。

美奈、カードを見て、驚く。

桜井「おめでたですよ。おめでた婚。ふふふ」

と言って、桜井も結衣の近くに行く。

美奈「・・・」

結衣の周りに社員が囲んでいる。

式の事や、相手の事などを聞いている。

美奈に気付き、すみませんと言って、

輪から外れ、美奈の席まで来る。

結衣「里中さん。おはようございます」

美奈「あ、はい。おはよう」

62	<p>修の部屋 (昼)</p> <p>(修、何か用事をしている。要相談)</p>
61	<p>美奈の会社 給湯室 (昼)</p> <p>結衣「あの、これ」 とメッセージカードを渡す。 結衣「里中さんには直接渡したくて。 私、結婚するので、今月いっぱい退職します。 今までありがとうございました」</p> <p>美奈、メッセージカードを読んでいる。 読み終わり、ポケットにしまうが、 もう一度取り出し、くしゃくしゃに丸めてしまう。 ゴミ箱に捨てようとするが、さすがにためらい、 またポケットにしまう。</p>

ガチャリ。踏太が戻ってくる。

修 「踏太、どこいったの？」

踏太 「・・・」

修 「おかえり。心配したよ」

と言つて後から抱きしめる。

が、ほどいて、立ち上がる。

修 「・・・」

踏太 「修。別れたい」

修 「・・・なんで？」

踏太 「・・・」

修 「何か気に入らない事、あった？」

踏太 「・・・」

修 「踏太。黙ってちゃ分からないだろ」

踏太 「・・・修の事、好きか分からないから」

修 「え？なんで？」

踏太 「好きだから一緒にいたいのか、ただ寂しいから」

一緒にいたいのか。分からないから」

修 「・・・」

踏 太 「だから別れたい」

修 「なんだよそれ」

踏 太 「ごめん」

修、踏太に近づき

修 「寂しいから一緒にいたい、でもいいから。別れたくないよ」

踏 太 「・・・」

修 「なあ」

踏 太 「寂しいから一緒にいたいっていうのは、

誰でもいいって事なんだよ？」

修 「・・・」

踏 太 「修は優しくて素敵だよ。

お母さんに愛されて育ったんだよ。僕は違うから。

愛情とか分からないから。

誰でもいいから一緒にいたいだけ。

修が僕に優しくしてくれるから辛いよ」

修 「辛いって。なんでだよ・・・」

好きだから優しくするんだろ。当たり前じゃん」

踏太「ずっと一緒にいたいって風にされると

重いんだよ。

正直。僕そんな覚悟ないよ」

修「・・・」

踏太「ごめん」

修「・・・」

踏太、奥の部屋に入り、

まとまとっている荷物を持つてくる。

ポケットから部屋の鍵を取り出し、テーブルに置く。

黙って見つめている修。靴を履いて部屋を出る踏太。

踏太「ありがとう。・・・バイバイ」

修「・・・（うん）」

パタン扉閉まる。

踏太の足音遠ざかっていく。玄関前に立ち尽くし、

その音をじっと聞いている修。

足音が聞こえなくなる。

	64		63	
智哉「あ」	<p>香織の実家 家の前の道（夕方）</p> <p>道の向こうから、手をつないだ親子 久子と智哉が歩いてくる。 智哉、遠くを見るポーズ。</p>	<p>短歌</p> <p>帰ってくる美奈。ソファに座る。 カバンの中からくしゃくしゃになった 結衣からのメッセージを取り出し、手のひらの上で 持っているのを眺める。</p>	<p>武の部屋（夜）</p>	<p>修 「はぁ・・・」 ため息。</p>

と、香織に気付き駆け寄る。

久子も香織に気付く。

久子「香織ちゃん」

香織の実家 リビング (夕方)

(久子に、帰ってきたら手を洗うと言われて)

智哉、洗面所に走っていく。

久子「偶然？」

香織「お店行ったらお休みだったから。

帰ってるのかなって思ってた」

久子「そうなんだ。電話くれれば良かったのに」

香織「そうだね。出掛けるの？」

久子「ううん。明日もいるよ。なんで？」

香織「ううん。お母さんは？」

久子「もうすぐ帰ってくるよ。買い物してるって」

香織「そう」

久子、買い物袋など置いて、一息つく。

久子「さてと・・・」

香織「何か手伝う？」

久子「ううん。ありがとう。もう出来てるから」

香織「そっか」

久子「・・・何か話したい事あったの？」

香織「・・・うん」

久子「治療？辛くなった？」

香織「ううん。赤ちゃん・・・出来ただけだね」

久子「え、本当に？良かったじゃないの」

久子の声にかぶるように、玄関ドアの開く音。

母・幹子が帰ってくる。それに気付き焦る香織。

香織「違うの。出来ただけ・・・」

香織の表情を見て察する久子。

久子「・・・」

幹子「なにー。香織来てるのー？」

香織「うーん」

幹子靴を脱いであがる。

幹子「ただいまあ。はあ疲れた」

とりビングに入ってくる。

幹子「めずらしい。来てたの」

香織「うん。おかえり」

幹子「ただいまーっと」

と言いながら手に持った

スーパールのビニール袋をテーブルに置く。

幹子「はあ疲れた」

ドカッといすに座る。

智哉がリビングに来る。

幹子すかさず

幹子「Good evening Tomoya.」

智哉「Good evening grandmother.」

幹子「How are you?」

智哉「Fine thank you. And you?」

幹子「I'm fine too.」

4人で食事。テーブルの上には久子の作った夕飯と
幹子を買ってきたお惣菜。

幹子はワインを飲みながらの食事。

幹子「いただきます」

と手を合わせる。他の3人もいただきますと言って
手を合わせる。

智哉、久子にお皿とお箸を渡す。

(久子、智哉には惣菜より、

自分の作った料理を食べさせる。

どんな料理が良いのかは相談。

惣菜との兼ね合いもありそう)

幹子「それで、最近どうなの？」

香織、私に話しかけてるの？

という感じに幹子を見ると、

自分に話しかけているようなので返事をする。

香織「なに」

幹子「お義母さんよ」

香織「うん。・・・まあ」

幹子「まあ何？」

香織「最近部屋こないから。顔合わせてない」

幹子「ふーん。意地張ってないでもう帰ってきたらどうなの？」

香織「・・・」

幹子「よく我慢して暮らせるわよね。」

お母さんならごめんだわね。

あんな人とひとつ屋根の下なんて。

考えただけでストレス溜まるわね。

真作さんも真作さんよね」

久子「お母さん」

幹子「何よ。あんただって、あそこの家の人たち

好きになれないって言ってたじゃないよ」

香織、チラリと久子を見る。

久子「お母さんがそうやって煽ってどうするのよ」

幹子「だってそうでしょうよ。おかしいじゃないの。」

思い出すだけで腹が立つわよ。

ねえ、あんたにはハッキリ言わなかったけど、

あの時ねえ、姉妹そろって不妊なのは

家系の問題なんですか、って言ってきたのよ？

そんなのある訳ないじゃないの。ばかばかしい」

香織「・・・」

幹子「うちをばかにしてるのよ」

久子「・・・」

幹子「あの人がまだ何か言ってくるようなら、

さっさと離婚しなさい」

久子「ちょっと」

幹子「今日だって、あっち嫌で息抜きに帰ってきたんでしょ？」

香織「・・・違う」

幹子「じゃなに？」

香織「・・・」

幹子「変に子供が出来る前にちゃんと考えなさいよ」

久子「ちよつと。そんな言い方はないわよ。ひどいわよ」

智哉、場の雰囲気を目をパチクリさせる。

そそくさと食事を終える。

智哉「ごちそうさまでした。宿題しーよおつと」

と言って、席を立つ。

久子「あ、智。ごめんね。後でジュース持っていくわね」

智哉、2階に上がる。

3人、沈黙のまま食事続ける。

香織の実家 2階の部屋 (夜)

久子「相変わらずでしょ」

香織「うん」

久子「何週だったの？」

香織「6週」

久子「そっか」

久子「真作くんに話し出来てないの？」

香織「うん」

久子「怖い？」

香織「うん」

久子「そっか。不安だったね。でも、大丈夫。

お姉ちゃんは味方だから。ね。信じて」

香織「うん」

久子「それに、真作くんは、

ちゃんと香織ちゃんの事

守ってくれるよ」

香織「・・・うう」

声を押し殺して泣く香織。

久子「我慢しなくていいよ」

香織、我慢出来ず泣く。

久子、香織の肩や頭を撫でて、慰める。

香織の家 リビング (夜)

香織、キッチンにいる。

真作が帰ってくる。

真作「ただいま」

香織「おかえりなさい」

真作「何時頃戻ったの？」

香織「お昼には」

真作「そう。お義母さん、お変わりなく？」

香織「ええ」

真作、香織の方を見る。表情がうかない。

真作「どうしたの？赤ちゃんの事、報告してきたんだろ？」

香織「・・・」

真作「喜んでくれなかったの？」

香織、話そうと決意する。

ケーキを買って、帰ってくる。

食べる準備。ろうそくが出てくる。

美奈「・・・」

ろうそくを捨てる。

美奈「いただきます」

と言ってケーキを食べはじめる。

やけ食いの様相。

短歌

電話が鳴る。武から。

武「もしもし。美奈？」

美奈「うん。これ家の番号？」

武「うん」

美奈「じゃ電波気にせず話せるね」

武「うん。・・・お誕生日おめでとう」

美奈「ありがとう。今ケーキ食べてるよ」

武「部屋？」

美奈「うん」

武 「そう・・・ごめんな」

美奈 「お父さん、どう？」

武 「うん。なんとか。食欲あるしね」

美奈 「そっか。ひと安心？」

武 「どうだろう・・・。手術で完全に取りても、

再発が結構あるみたいで。

経過観察が必要みたい」

美奈 「そうなんだ。武くん、前から

実家に戻りたいって言ってたし。

ちようにいい機会じゃないかな」

武 「俺って変かな？」

美奈 「え？」

武 「家族にベッタリしすぎてるのかな。一人っ子だし」

美奈 「関係ないと思うよ。親の事思えるって素敵だよ」

武 「そうかな」

美奈 「うん。武くんがいてくれたら、ご両親も安心だと思うよ」

武 「うん・・・。せっかくの誕生日に

一緒に居てあげられなくて、ごめん」

美奈「大丈夫。仕事するよ」

武「せっかくだから、素敵な一日過ごして欲しい。

そうなるように願っとく」

美奈「うん」

武「じゃあ、また病院行かなきゃいけないから」

美奈「うん。またね」

武「うん」

電話を切る。

ケーキ食べる美奈。

短歌（電波が届いても、結局大事な事を

ひとつも話し合えない）

電話が鳴る。

美奈と香織が慌てた様子でやってくる。

	71	<p>陽一の病室に入る。</p> <p>(電話の音、ここまでひっぱても良いかも)</p> <p>病院 陽一の病室 (昼)</p>
	72	<p>美奈と香織が入ってくる。すでに到着している修がベッドの横にいる。陽一は眠っている。</p> <p>美奈「陽一くん……。修くん？」</p> <p>修「大丈夫。今、眠ってる」</p> <p>美奈と香織、陽一を見つめる。</p> <p>道 (昼)</p> <p>美奈、香織、修、歩いている。</p> <p>修「働きすぎの過労と。舞子のお骨の事もあったのかな。</p> <p>免疫力が落ちてるって」</p> <p>香織「お骨、なんとかしてあげたいな……」</p>

修 「うん」

美奈 「どれくらいいるの？」

修 「うーん。しばらくは検査入院だろうね」

美奈 「そっか。退院したら、またみんなで

パーティーしたいな」

修 「そうだね」

香織 もうなずく。

美奈 「もちろん踏太くんも。ね」

修 「踏太は駄目だよ。別れたから」

美奈 「？・・・そうなんだ。・・・仲良さそうだったのに」

修 「いろいろあるよ。僕らには確実なものがないからさ。

結婚とか、子供が出来るとか。気持ち以外に

繋ぎとめておいてくれるもの、無いしね」

美奈 「・・・」

香織 「確実なものなんて、どこにもないよ。

結婚してたって。どうなるかなんて、分からないし」

美奈 「どうしたの？」

香織「赤ちゃん、駄目になっちゃったんだ」

修「・・・」

香織「ずっと夫の親と関係良くなくてさ。

赤ちゃん出来て、変わってきたんだけど。

駄目になっちゃってさ。

私も、本当に赤ちゃんが欲しいのか

分からなくなっちゃってさ・・・」

2人より少し先を歩く香織。

香織「何がいいとか、どうしたら幸せになれるかなんてさ

確実なものないよ」

香織、歩いていってしまう。

香織の家 リビング (夕方)

真作ソファに座って、考え事をしている。

香織が買い物袋を持って帰ってくる。

香織「・・・帰ってたんだ」

真作「ああ」

香織台所に向かう。

真作「作るのか？」

香織「うん」

香織、静かに夕飯の準備を始める。

香織「何だと思う？」

真作「ん？」

真作、しばらく考えた後

真作「ハンバーグじゃないかな」

香織、少し驚き嬉しいような複雑な表情。
作り始める。

× × ×

テーブルの上にハンバーグ、サラダ、ライス。
2人とも食べている。

真作、少し食べてはため息をついている。

真作の方を見ず、うつむきながら食べる香織。

74

陽一の病室　（昼）

病室内に陽一のお見舞いで

修、美奈、香織がそろっている。

修　「会社の人来た？」

陽一　「いや」

修　「冷たいな」

陽一　「そんなもんだよ」

そこに舞子の姉・清美がやってくる。

舞子の遺骨箱と、遺影を携えて。

陽一　「お姉さん・・・」

清美　「陽一さん。私・・・」

陽一　「・・・」

清美　「・・・間違っていました。」

武の実家
(夜)

私一人が悲しい訳じゃないんですよね。

舞子をずっと一人じめしてしまつて・・・。

本当にごめんなさい。

もう舞子は、ゆつくりさせてあげなきゃ

いけないですよね・・・」

と言つて、陽一のベッドにあるテーブルに

遺骨箱を置く。ハラリと風呂敷を開けると、

笑顔の舞子の遺影。

陽一は思わず涙がこぼれてしまう。

座っている民雄。恵子、武もいる。

恵子「そろそろ横になつた方がいいんじゃない？」

民雄「ああ。うん。・・・やっぱ家はいいな」

と言いながら立ち上がろうとする。

恵子「武」

78	美奈の部屋 玄関前 （夜）		77	道 武の部屋から美奈の部屋までの道途中 （夜）	美奈歩いている。		76	武の部屋 郵便受け前 （夜）	武 「あ、うん」 民雄に近づき、立ち上がる介助をする。
					美奈、カバンの中から 買ってきたばかりの封筒を取り出し、 封を開けて、ひとつだけ出す。 同じく、カバンから 武の部屋の鍵を取り出し、封筒の中に入れ、 ポストに入れる。その場を去る美奈。				

帰宅してくる美奈。

カバンの中から、部屋の鍵を出そうと探す。
鍵がない。

美奈「あれ？・・・」

ゴソゴソ探してもないので、

その場でしゃがみ込み、カバンの中身を

ひとつずつ出して、鍵を探す。が、鍵はない。

美奈「あれえ・・・」

道 武の部屋から美奈の部屋までの道途中（夜）

美奈、歩きながら鍵が落ちていないか探している。

美奈「無いなあ・・・ふわあ」

眠くて頻繁にあくびをする。

しばらく歩いて立ち止まる。

もう一度、最後に鍵をどうしたのか考えてみる。

気付くと、以前ひったくりにあった場所に来てしまっていた。

美奈「ここ・・・」

そそくさとその場を後にし、

下を見て探しながら歩いていると

後ろから通行人がやってくる。人の気配に驚く美奈。

美奈「キャア！」

通行人「わー！なんですか！？」

美奈「いえ、あ、すみません」

通行人「びつくりした・・・」

と通行人立ち去る。

美奈「すみません・・・」

武の部屋 郵便受け前 (夜)

結局、武の部屋まで
引き返す事になってしまった美奈。

とても疲れた様子で、郵便受けの周りを探す。

美奈「はぁ……。無い。どこいったんだろう……。」

としやがみこむ。

もう疲れているし、

ずっと外をウロウロする訳にいけないので、

郵便受けに手をつ込み、鍵を取ろうとする。

美奈「うう！」

武の部屋
(夜)

ガチャンと鍵を開けて、室内に入ってくる美奈。

美奈「ふわぁ……。疲れた」

携帯電話を取り出しながら、ベッドに横になる。

携帯電話の時計を見る。夜中の1時。

美奈「1時じゃん……。はぁ……。(短歌)」

と言いながらいつものごとく

メールに短歌を打ち込む。そのまま寝てしまう。

誤ってメールを送信してしまう。

寝ている美奈。9時49分。ハッと起きる。

美奈「は！何時？・・・」

と言いながら電話を探す美奈。

枕の下に埋まっている。見つけて手に取る。

電話の、メール送信済みの画面。

美奈「ん？！」

電話を確認すると、

下書きしていた短文メールを

送信してしまっている。

美奈「えー！！！」

ベッドから飛びおりる。

美奈「しかも遅刻だし！」

83	<p>武の部屋 アパートの前 (朝)</p>
84	<p>道 武のアパート近く (朝)</p> <p>勢いよく階段を下りる美奈。</p> <p>美奈「どうしよう!どうしよう!」</p> <p>と何度もつぶやいている。</p> <p>美奈「ん?」</p> <p>誰?と思いながら武の姿を見つめる。</p> <p>美奈「あれ・・・」</p> <p>武、美奈のところにやってきて、抱きしめる。</p> <p>武「はあはあはあ」</p> <p>走ってきて、息切れしている。</p>

美奈「……」

少しの間。

美奈は、別れようとも思っていただけに複雑な気持ちがある。

武、深呼吸をして息を整えて、

武「何回も口に出せずにいた気持ち

今こそ君に伝えてみせる」

と、美奈の耳元にささやく。

そして、抱きしめていた体を離す。

武「美奈・・・結婚してください」

美奈「え、あ」

見つめ合う2人。

美奈「はい」

キョトンとした様子で答える美奈。

武「そう。やった！やったー！よかった！」

美奈をもう一度抱きしめる。

笑顔になる2人。

	85	1年後
		テロップ
	86	霊園 舞子のお墓の前 (昼)
		喪服姿の陽一、修、香織がお墓の前にいる。 手を合わせている。
	87	霊園近くの道 (昼)
		陽一、修、香織歩いている。 陽一「二年経ったら違うもんだね」 修「陽一も？・・・そう思えた？」 陽一「二年。また一年経ったら寂しさなんて、少しずつ減ってくる。薄情だね」

香 織「美奈来れなかったね」

陽一、ポケットから絵葉書を取り出す。

お腹の大きな美奈、隣に武。

2人とも笑顔の写真。

（お腹の中には大切なものを詰めたい）

陽一「もうすぐ生まれるらしいからさ」

香 織「そっかあ」

と絵葉書を陽一から取り、

美奈の幸せそうな顔をじっくりみつめる。修も見ろ。

香 織「はい」

と言って、絵葉書を陽一に返す。

修、香織の指を見る。結婚指輪が外されている。

（例えば、葉書の写真じゃない面を

裏返して読んだ時に指輪がない事を気付く）

下の街を見渡した後、おもむろに叫ぶ陽一。

陽一「舞子。俺も幸せになるぞ」

修、香織、突然の事で驚く。

陽一の後ろ姿を見つめる。

陽一「自分なりの幸せ探すぞ」

とつぶやき、歩き出す。

香織「私もー！」

と同じく叫ぶ。

2人を見つめ、うなずく修。

3人歩いていく。

おわり